

コンプレックスの解消  
——犀星の第三期小説創作について

劉 金 挙

## Summary

### The Success in Overcoming Inferiority Complex —On Saisei's Third Stage of His Novel Writing

LIU Jinju

Saisei Muroo, who had a deep-rooted inferiority complex, chose literature creation as the means of “derivative compensation”. In his early poetry, being unable to find any clue to overcoming his inferiority complex, in desperation, he changed his life course to writing novels. In the first stage of his novel writing, he repressed his inferiority complex and pursued “false compensation” and “solace compensation”. In his works rich in lyricism, he created a perfect world. Thus, he succeeded in “overcoming compensation”, and established a definite position as a novelist. However, the result of the glorification described above was a temporary self-intoxication. He was able to forget about or weaken his inferiority complex for a while, but was far from overcoming the deep-rooted problem. He became aware of the fact, and tried to overcome his complex at its root. In the second stage of his novel writing, by bringing his birth and background into light, he disclosed the cause of his inferiority complex. He then went through “aggressive compensation”, and in his works, created the human with both wild-natured and good-natured aspects. He sought “compensation” in the “resistance” of “*shiseiki*”, which is indifferent as to what it cannot do or what it wants to accomplish. In this way, he fulfilled his “desire to act violently”. As a result, he was at last free from his complex to a certain extent. However, because he “persisted in his own ego”, he had not yet attained his goal of overcoming his inferiority complex. After going through various life experiences, he continued his endeavor to eliminate “wound-up emotion”, got rid of his complex and attained “self-actualization”. After he reached the point of maturity in his life, he made use of his well-developed writing style, and generalized his own extraordinary birth and background. He, then, reproduced the process of overcoming his inferiority complex, and succeeded in creating a real human image. Thus, he perfected his literature.

## 0. はじめに

私見では、心の中に根強く絡んだコンプレックスから脱出するために、「派生補償」の手段として文学創作を選んだ犀星は、初期の詩作において、コンプレックスを脱出するいとぐちを見出さないうまま、怨念の叫びを発してから、小説に転進し、「みせかけ補償」と「なぐさめ補償」を求め、第一期の小説創作において、自分の過去を著しく美化し、「打勝ち補償」に成功して、小説家として不動の地位を築き上げる。しかし、これはあくまでも『コンプレックス脱出の試み』である(1)。その後、根本的な脱出を図り、第二期の小説創作において、「暴れ廻るやうな気持ち」の「市井鬼」のなりふりかまわぬ振る舞いを通して「攻撃補償」を求め、コンプレックスからある程度解放されているが、「自我のみにしがみつ」いたせいで、脱出の目的はまだ達成できていないのである(2)。生涯の努力を重ねて、第三期の小説創作に入る前に、すでに「感情のからみつき」を排除して、「自己実現」を果たした犀星は、第三期の活躍を遂げ、すばらしい作品を多く創作している(3)。

本稿における『コンプレックスの解消』という表現は、便宜的につけたテーマで、むしろ「自己実現」を果たした犀星のコンプレックス解消努力とその過程を再現したものと言ったほうが適当である。

本稿では、前稿までの分析を踏まえ、作品に即しつつ、心理学の角度から作風と主人公の性格を分析するという方法を継続して用いて、第三期小説創作において再現された、犀星のコンプレックス解消努力とその過程を見ていきたい。

## 1. コンプレックスの内的解消

周知の通り、暗い出生や芳ばしくない生い立ちなどによって、犀星は長い間強いコンプレックスを持っていた。しかし、文学創作に「補償」を求め続け、長らく努力したところ、第三期の小説創作に入って、「劣等感」はやはり持っていたが、「コンプレックス」は既に解消されていたと思う。

このコンプレックスの解消について、注(3)の拙稿において分析を試みたことがあるが、ここではそのポイントを簡単に紹介し、補足させていただこう。

コンプレックスというかぎり、それは感情によって色どられていなければならない。感情のからみつきのない、自分の劣等性の認識は、むしろコンプレックスを克服した姿である(中略)はっきりと劣等であると認識できた場合は、それは問題でもなく、コンプレックスでもない。このような意味で、劣等感コンプレックスは、優越感も必ずその中に混入させているものだといってよい(中略)自我にある程度意識されるのは、その劣等感の方ではあるが、そこに優越感が微妙にいりこんでいるところが、コンプレックスのコンプレ

ックスたるゆえんである。(下線部は稿者による) (4)

と、河合隼雄氏が詳しく分析しているように、劣等感を持っていても、はっきりとそれを認識できて、「感情のからみつきのない」、即ち人間の感情に影響されないかぎり、必ずしもコンプレックスを持つに至るとは限らない。劣等性と優越感の微妙な混在こそコンプレックスであるということである。

劣等感とは防衛機制により抑圧され、他人より優れた存在になろうという野望や、攻撃的態度に転嫁すると、アドラーが指摘している(5)。まさにその通りである。劣等感とは相次いで、「ともかくも『偉くなりたいと思つて居た』」り、「私は『大きくなつたら……』と深い決心をしてゐた。『もつと大きくなつたら…』と地べたを踏んだ」(『幼年時代』)り、「机にかじりつきながら、どうかして偉くならなければならないといふ要求のために、毎日、胸騒ぎと故もない震へやうを心に感じながら、庭の一点をみつめたままで暮らすやうなことがあつた」(『性に眼覚める頃』)り、「今に見ろ、私を苦しめたもの、軽蔑したもの、低めたもの等が、一人で私のあたいを感じなければならないときがあるに違ひないと、強く信じた」(『或る少女の死まで』)りするという「優れた存在」になろうという野望と、「物すごく暴れてみたい氣」の攻撃的態度に転嫁してしまっている。別の言い方で言えば、コンプレックスは犀星に「みせかけ補償」、[「なぐさめ補償」と「攻撃補償」を追求させることになるのである。「木に登つてみると、氣が清々して地上にゐるよりも、何とも云へない特別な高いやうな、自由で偉くなつたやうな氣がするのであつた」(『幼年時代』)から、木に登ることが好きであることや、「あの雑誌を読む人々はみな私のものに注意してゐるに違ひないと思つた。この故郷の人も近所の若い娘らまできつと私の詩を読むに違ひない」(『性に眼覚める頃』)と自慢げに思うことや、「嘗てないほど氣ほひ立つていきなり伊之に掴みかかり、その肥つた手をべつたりと伊之の顔に引つかけたなと見ると、伊之の目尻から頬にかけて三すぢの爪痕が掻き立てられると、腫れたあとのやうに赤くなり、すぐにぐみの汁のやうなものが流れた」(『あにいもうと』)という「市井鬼」の「おもん」のような野性的な言動などは、いずれもその現れに過ぎない。

優越感と入り込んだ劣等性が、当然のことながらついにコンプレックスに発展してしまうのである。それで、自分の出生については、「自分の聞き辛いことは母(義母・稿者注)のいふ女中の子といふ言葉だつた」(『弄獅子』)と、その言葉に神経質になったり、家族については、「それはまるで無学な人間がより集まつて他人同士が殖民地部落のやうに、一家族をつくりあげてゐた」(同上)ものだと嫌がったり、自分の容貌については、「自分が熊の如き粗野な容貌を持つてゐる」、「自分は一體に容貌の端正典雅な人物や、それに近い人間にうちむかう時には、ゆゑなく本能的にまず一通り反感を持つ性癖があつた」(6)と悩んだり、自分の学識については、「私は普通教育といふものから一足飛びに文學の中心に入つた關係から、様々の場合に十人の人が知つてゐることで私一人しか知らないやうな常識的なことがらのため、私は自ら差かんで赦くなり私の遂に為さざりし学業を惜しむ氣になることが、屢屢であつた」(7)と悔しがったり、「毎時もいまの食堂よりもつと下等な食堂で食事をとる私は、その食堂にはいるときは裏口から這入つて、裏口から帰るのであつた。誰一人も見えてないくせに、なにほどか

の羞恥心をまだ大切に抱きかかへてゐる私は、そんなふうにしてこの悲しい朝の時間を人眼から避けるやうにしてゐた」(8)と悲しがつたりする、とあるように、出生、生い立ち、容貌(特に顔)、学歴、知識と貧困生活による強いコンプレックスを抱いた犀星は、長い間それに苛まれている。

しかし、人生を歩み、いろいろと奮闘努力してきて、名詩人としても、名小説家としても、確固たる地位を持っている犀星は、ついに心の中に根ざしたコンプレックスを克服し、「自己実現」を果たして、文学の再出発と言ってもいいほどの、輝かしい第三期の創作に成功している。

この段階に入って、犀星は、

小説「舌を噛み切つた女」を書き、「妙齡失はず」を書き、長編「三人の女」を書き、「舌を噛み切つた女」は歌舞伎座で上演、または映画化され私のまはりは賑やかになり、書物は今まで受けた同業の士に禮本として返すことも出来るやうになつた。(9)

ほど、輝かしい戦後の『老大家の復活』(10)を果たして、大いに評価されている。しかし、

それらは意氣込んで書いたといふより、すべてが偶然の偶作であり私はすでに六十七歳になつてゐた。そんな年で空騒ぎしてゐられるものではない、二つの沈滞期を乗り越えて来た私にいくらかの立ちなほりがあつたとしても、さう長續きするものではないのである。私は自分を制するやうな氣になり、寧ろ悒鬱な氣分を交へたくらんであつた。人間はどこまで行つたら自分のちからを測り切れるのか、そんな割り切つた問題の前に私は立ち竦んで、なんでも、やれるだけやらう、やれなければそれでたくさんではないか、さういふ氣前の私は今までの自分の取り纏めにかかつた時、『東京新聞』が作品をもとめ私は「杏つ子」を連載した。(11)

とあるように、この段階において、「年をとると、本物だけになつて、生きかへつてゐる」(『蜜のあはれ』)で、自分の本来の姿のままで登場して振舞つて、自分のことを普遍化、社会化することに成功している。「自己実現」を逃げたゆえ、第一期に持っていたちょっとした成功を収めた時の抑えきれないほどの優越感もまるで過去の夢のようなものになれば、第二期に持っていた「自我のみにしがみつ」きすぎたという癖もなくなってしまったのである。「感情のからみつきのない、自分の劣等性の認識は、むしろコンプレックスを克服した姿である」とあるように、犀星は、その必然性を自覚せずに、自分の内的世界からコンプレックスの脱出を達成している。

さらに、第三期の小説創作において、コンプレックス解消の経過を再現しているが、前と違って、生涯に経験した様々な侮辱によって生じた自分の劣等性の源を正確に認識し、「ありあふれた日常茶飯事」(『私の履歴書』)と見なし、栄光のすべてを「偶然の偶作である」と、淡々と物語っている。これは作者が並々ならぬ努力を通じて逃げた成長の結果である。コンプレックスが解消されているということこそ、犀星が第三期の輝きを飾る根本的な原因だと思う。

以下では、再現されたこの解消の努力を見ていこう。

## 2. 作品に再現されたコンプレックスの解消

昭和三十年、犀星にとっては生涯最高の昂揚期が始まる。この時期も引き続き赤裸々に自分の暗い出生を暴露しているが、もはや現実と過去、自分と社会との区別はなくなり、前期の抒情性と、中期の市井鬼もののリアリティ・迫力・野性とがここで止揚、統合される。それにより、作品全体の雰囲気も落ち着き、穏やかになり、作品中の人物ももっと真実の人間に近づいている。おまけに、長年努力を重ねた成果として、創作方法も自分の意志を自由自在に表現できる円熟の域に達して、十分な説得力を持つようになっている。本稿での分析にあたって、異なる表現に言い換えできないほど、稿者の言いたいことや思いついたすべてのことは、犀星がすでに作品において最適な言葉で表現し、書き尽くしてしまっているような感じがする。そのため、分析中割愛できず、小説の内容そのままを引用した部分が非常に多い。このように、犀星の創作した「直截な感覚的表現と屈折した心理的表現が重なった文章は、誰にも達せられない独自の自己表現と他者描写が渾然とした独特の文学世界を形成している。それこそが真の文学といえる文章なのである」(12) と評価されているように、犀星文学も高みに達することになる。

第二期の作品と同じように、この段階において、作者はやはりフィクションの世界において、いずれも出身は芳しくないが、野性的な一面と、やさしい一面を兼ね備えている主人公の人間像作りに励んで、かつて心の中に潜んだ劣等感コンプレックスと戦った過程を再現している。しかし、コンプレックスがすでに解消されたから、このレベルに留まらず、第二期の作品よりさらに進んで、自分の生活や体験から普通の人間の生活へと押し広げ、それを社会化、普遍化して、人生の教訓として作品中で多くをまとめている。

この段階の作品は、『舌を噛み切った女』、『かげろうの日記遺文』、『蜜のあはれ』をはじめとする虚構による作品と、『杏つ子』に集約される自伝風な作品と、やはり二種類に大別できる。

### 2.1 和らげられた野性によるコンプレックス脱出

「各人の心に荒れ狂った感情の嵐、これがコンプレックスの『解消』には必要なのである」(13) という指摘があるように、この段階に入ると、「野性」はやはり必要である。しかし、コンプレックスがすでに解消された後の再現なので、第二期と比べて、質の違ったものになっている。

『舌を噛み切った女』の「すて」は、十三の時から山賊の首領、袴野ノ麿に拾われ、育てられ、最後にその妻にされる。彼女の野性と反逆振りが一番よく表されているのは、自分の身を奪った貝ノ馬介との戦いと、自分の子供を奪おうとする袴野ノ麿との喧嘩である。貝ノ馬介との戦いでは、その舌を噛んで、殺してしまう。自分の恩人でもある袴野ノ麿との喧嘩では、「この子にちよつとでも触れたらそれがあんたの最後だと思ふがいい」と警告し、そして、自分の決心を知らせるために、炉にささった竹の火箸を唇に銜えこみ、噛み砕く。その鮮血を噴いた

様子は、貝ノ馬介のあの日の「どこが何やら見境のない血だらけの顔面」に似ていると、袴野に連想させる。その時、さすがの山賊の首領であっても、「袴野は生まれて初めて恐れといふものを」感じて、すての口の手当てをし、「謝る、すて、おれが悪かつた」と伏してしまう。

小説はすてが子供を都の女の元に預けるために、都行きを決めるところで終わる。それは袴野の目を盗んでではなく、「衆人の目の前で」堂々と実行されるものである。「戻るか」という袴野の問いに、「ほとんど冷却し」きった表情で、「戻るか戻らないか分からない」という言葉を残して出発するのである。ここでの何をも憚らないすての行動は、犀星本人の「物すごく暴れてみたい」衝動に他ならないと思える。

『杏つ子』の野性は、夫の亮吉と喧嘩する場面でもっともよく表されている。夫に向かって、杏子は、

- お前はなんです、お前などと立派につかへるあなたが、何處にゐるんです。お前とはなんだ。お前とは？お前などといふ前に、わたくしはその言葉の相手にどういふ言葉をつかつたらいいかご存知ですか。（「お前という言葉」）
- そんな吝くさい考へをもつていらつしやるから、四年間書きとほしでもて、原稿料は一銭もはらないぢやないの、他人が百万円取つてゐたつて、取れるわけがあつて取つていらつしやるんです、お馬鹿さん、他人の原稿料に口出しの出来るお方かどうか、ちつとは馬鹿も休みやすみ言ふがいいわ。（「バカにひげが生えてゐる」）
- あんたでなかつたら誰にその言葉が言へるもんですか。わたくしは二十四時間づつ毎日見てゐたわ、どんなにあなたがお馬鹿さんだつたかを言へるものは、わたくしは最適者なのよ（中略）わたくしはあなたに引き摺られてゐる点ではバカだが、そのほかの意味ではあなたほどのバカではない、あなたのバカにはひげがはえてゐる。（同上）

というふうに、ここにあるのは、なんと鋭い言葉であろうか。

しかし、作品の中にこのような赤裸々に野性を表す部分はあるにはあるが、第二期の作品と比べて、作者は落ち着いてきて、より含蓄的になり、ほとんどの場合、赤裸々に描くのではなく、穏やかな雰囲気の中で淡々と他人事のように物語るようになる。このような和らげられた野性はもう怖いものではなく、むしろ一種の魅力として描かれている。その後の作品でこれがいっそう発展されている。

『かげろうの日記遺文』の中の冴野は、「あの人の手に噛み付いてやるわ、太刀もとれないやう、骨も噛み砕いてやります。一心になれば太刀は怖くはございません」（「七、名もなき侍」）のような、なりふりかまわぬ言動はあることはあるが、「情熱への回顧のためには、何者にも恐れない野性の女の一面」（「同上」）は主にそれによってではなく、従順な行動と柔らかい言葉を通じて表されている。例えば、時姫は冴野と一回だけ会ったことがある。それに、その面会は冴野に兼家から離れて、ゆくえは「殿がお尋ねになつても、目元届かない遠い處です」という要求を出すためである。それを聞いた「冴野はかすかに震へ、かすかに眼に怒りを帯び、かすかに抗ふやうな様子であつたが、それはしなやかに崩れて顔はもとのまま澄んでいつた」（「八、香の風」）だけである。また、紫苑の上は冴野と面会し、話をしたことが二度ある。特

に、二回目は、時姫と同じく、兼家から離れることを要求し、そして同じく慰謝料にあたる黄金の提供を申し込むためである。それに対して、

わたくしは黄金を貰ふといふことに恥を感じてゐる。身を引く話のあつたときに、女は黄金を貰ふものではない、黄金で人間の仲が捌けるやうになるには、まだ年月が経たなければ、さうなりますまいが、わたしには食べるだけの物は、もう、用意してございます。

町の小路にある女といふ者は、つねづね、さういふ細かい前方の暮しを何時も目に見てゐるものでございます、と、冴野は始めて幾らか不機嫌な顔持になつた。(「八、香の風」)  
と、これぐらいのことしか言わず、これ以上の暴れはしない。

特に、『蜜のあはれ』の段階になって、野性は一種の美として描かれる。その小説のモチーフは、「一匹の魚が水平線に落下しながら燃え、燃えながら死を逃げる」ことで、人間の、女の生涯のはかない美しさを描ききったところにある。なぜ作者が金魚を主人公にしているかという、「金魚はお魚の中でも、いつも燃えてゐるやうなお魚なのよ。からだの中まで真紅なのよ」、「燃えてゐるから、をぢさまに好かれてゐる」(「三、日はみじかい」)からだと言われているが、実は「燃える金魚といふけど、ほんとはおとなしく見えても、すぐ、骨の中までかつと燃えてくるもの」で、おじさんの話で評価すれば、「君なんかのやうに少女くさいのは却却手にのりさうで、いざとなると、びよんと跳ね上つてしまつて草臥れまうけさ」(「一、あたいは殺されない」)というのは本当の原因である。

金魚姫は正直一方で、

をぢいさまのバカ、バカヤロ(中略)會ひたいくせにそれを耐えて、いらいらしてゐてそれが本心だといふの、會ひたくても飛び出せもしないくせしてゐて、意氣地なしね、さうさつきのね、両方で同じことを言つてゐるんだ、をばさまはをばさまで逃げ廻つてゐるし、此方は此方で逃げを打つなんて、揃つて人間つて嘘のつきあいをしてゐるやうなものだ。人間なんて生まれてから死ぬまで、嘘の吐き合いをしてゐるやうなものだ(中略)騙されてゐながらそれがうれしいことになるのかしら、あたいはそれがよく判らない。  
(「四、いくつもある橋」)

と、おじさんにずばりと自分の言いたいことを言ったり、

バカだわ、お會ひしたくて前をぶらぶらしてゐるくせに、いざとなると、びくびくして避けてゐるぢやないの。そんなに厭だつたら、初めつから来ないほうがいいのよ。(「四、いくつもある橋」)

と、田村のおばさんを責めたりするという野性的に見える言動を通じて、二人を激励する。

このように、野性は段々と和らげられ、潜められたものになり、最後に一種の美德として発展されてくる。それゆえに、作り上げられた人間像もより魅力的なものとなって、犀星の心に根ざしたコンプレックスを徹底的に解消するのに役立つ。

## 2.2 純で、自然な優しさによるコンプレックスの脱出

「自我がコンプレックスに対して、その内容を少しずつ統合しようとしているとき、自我は

望ましい発展を遂げ」(14) するという河合氏の指摘通り、コンプレックスが自我に統合される時、両者が望ましい関係にあり、人間の自我の主体性はコンプレックスに脅かされない。それで、優しい心の持主である犀星が第三期作品において作り上げた主人公たちもやはり善良的で、やさしい一面を持っている。しかも、その「優しさ」は純なもので、至高なものである。

『舌を噛み切つた女』の「すて」については、描写が余り多くなされていないが、危険を顧みず、何の企みもなしに、盗賊に遭われた名も知らない「都の女」を都外れに送っていくことから、そのやさしさが伺える。

『杏つ子』のやさしさは夫の亮吉との結婚生活によく表されている。結婚後、夫の亮吉は四年間も書きつづけ、一銭も儲けていない。そんな生活の中で、毎日生活費も搾り出さなければならぬし、夫のタバコ代と酒代も工面しなければならない。その上、神経質な夫の文句なども我慢しなければならない。そのため、自分の好きな衣服、飾り物、最後には、自分の幼年時代の宝物で、自分と父との精神的慰安と希望の寄託であるピアノまで売ってしまう。杏子にとって、これはどれほど苦しいことであろうか。しかし、彼女はやはり辛抱している。父に「とにかく喧嘩するなら、ぎゅうぎゅうまで遣れ。相手がふらふらになるまで、畳みかけて遣るんだ、いい加減の喧嘩なら、やめるがよい」と薦められても、「あんまり遣ると可哀想だわ」(「もつれ」)と亮吉のために弁解したり、彼を労わったりする。その他に、弟嫁の「りさこ」の面倒を見たり、やりたくはないが、見合いに来た人を観光に案内したりすることからも、このやさしさが伺える。

『かげろうの日記遺文』の中の冴野は、兼家の話では、「町の小路の女のやうな人だ。女といふものの蜜をたくさんにたくはえてゐる女が、私には甘い薫りを与えてくれる」(「二、山辺の垣ほ」)人であるという。なぜ地位が高く、才能のある美女達に囲まれている兼家はこう思うようになるのか、冴野本人の話を借りて説明すれば、

わたくしは名もない女ですもの、名もない女はしまひには退がらなければなりませんし、嫉妬めいたことも控へがちにしなければ、殿にお縋りすることもできようはございません。それに、わたくしはもう若くはございません、ただ、悲しいことには女のからだをそなへております(中略)学のない女は去らなければなりません。(「六、うたたねのまに」)とあるように、彼女は自分自身のことを分かり尽くして、

或ひはあなた様は何時かは、それは測り知ることのできない、ずつとずつと先の日にはわたくしの手元に、お還りにならないときがあるかも知りませんし、さういふ日が参りませうとも、わたくしは慌てまいと勉めて心がけて居ります。今までに澤山いただいた愛情は、わたくしの前にも後ろにも、つみかさねられ、それを読み直すためにどれだけ多くの日々が必要かは判りません。だからこそ、若しあなた様がいらつしやらない時がございましたも、私は前の方から一枚づつ読んでゆき、そしてその日一日をゆたかに、少しの悲嘆を感じないで過ごしてゆくことができますゆゑ、あなた様はお心のままに紫苑の上様、時姫様にも、その手にある暖かさをお分け下さいませ。さうしていただいたのこりの、ほんの少しばかりの愛情をお受け出来れば、冴野はたくさん想ひにふくれてまゐります。わた

くだけでいただくには、あまりにあなた様の愛情は勿体無く、また僭越でございます。

(「五、山もしづまる歌」)

と、兼家に出した手紙に書かれているように、無理な要求などは全然出さない自粛型の淑女と言えよう。それゆえ、兼家は「少しも卑しくも低くもない。あの女らには、女が持たねばならないあまさが澤山ある」と感じて、紫苑の上に、「お身よりも、もつと自然に生きてゐると言はれよう、お身は学んでゐるが、町の小路の女は女そのままなのだ」(「二、山辺の垣ほ」)、「あれはそなたほどの学識はないが、女としてのあでやかさをそのままに私にくれてゐるのだ」(「三、眞菰草」)と言わずにはいられないのである。

そして、兼家から離れた最大の原因は、時姫や紫苑の上に要求されたり、提供された慰謝料にあたる黄金を領収したりしたからではなく、「本心で考へる暇もないくらい、わたくしは時姫様のお悩みを取りのぞきたいとぞんじました。」「殿は、三人の女の沼で、溺れてお終ひになるかもしれません。」「わたくしだけが其處を去つてしまへば、お二人だけの世界になります。そこに、日が晴れてゆくのでせう。殿はわたくしを暫くは、お捜しになるかも知れませんが、あなた様のもとに臆てはおかへりになります。時姫様のご本邸にも、日は照るのでございませう」(「八、香の風」)と、冴野が紫苑の上に言うように、思いやりのある考えそのものである。

こんなに慎ましやかな女だからこそ、結局兼家にとって、冴野は「私の影にゐて、私を守り續けてゐるのだ、そなたなしに官の仕事を励むことができなかつたであらう」(「九、くろ髪」)ほどの存在となつたのである。

最後に、『蜜のあはれ』の金魚姫は、何でもずばりと言い出すタイプだが、非常に心のやさしくて、善良な女性として描写されている。例えば、金魚の餌を売る年取ったおじさんの体のことを心配して、「おぢいちゃんもお年だから、杖でもついて氣を付けてね、あまり焼酎をおあがりになると、お腹が焼けてくるわよ」(「四、いくつもある橋」)と注意したりする。特に、おじさんと田村のお婆さんのことを案じて、できるだけ互いに認め合わせるように努力している。

コンプレックス解消のほうからいえば、赤裸々な野性より、純で、自然な優しさのほうがずっと効果的である。例えば、暴れたりせずに、慰謝料にあたる黄金を、受け取ろうともしないということは、あくまでも冴野の自らを卑めない一種の崇高な強さ、場合によっては乞食となることをも辞さない純粋さであり、抗議と反抗である。この心の中にある反抗、作品中の言葉を借りて言えば、「外部から動かされしないで、自分を守り續けてゐて少しの乱れも崩れも見せないであるのが、紫苑の上自らの卑小を感じさせた」(「八、香の風」)と描かれているように、暴れることよりずっと効果が高まるのである。

## 2.3 成熟した世界への邁進

成熟や個性化にむかう成長は、意識性の拡大を意味する。心理的におとなになるには、内的な力について理解を深め、これを自由に動かせるようになることである(中略)おと

なであるということは、知的な機能だけではなく、情緒的生活も意識的に自由に動かせることである。それは自分自身を受け入れ、人生が投げかける課題を受け入れることである。  
(15)

と、France G.Wicks が人間の成長と成熟について強調しているように、人間は自分の内的世界を理解した上で、自分の情緒的生活など完全にコントロール出来るようになってこそ、成熟を達成していると言える。言い換えれば、「自我のみにしがみつ」かないこと、または「感情のからみつき」を排除することである。そのシンボルは、「自分自身を受け入れ、人生が投げかける課題を受け入れることである」。犀星の生涯に照らせば、第三期の小説創作は、まさに彼の「成熟」した実りだと言える。コンプレックスを解消して、人間成熟を遂げた犀星は、自分の生活や体験から普通の人間の生活へと押し広げ、社会化、普遍化して、そこから人生の教訓として多くをまとめている。

ここで、特に特筆すべきなのは、『杏つ子』のことである。

内容を分析するにあたって、まず作者の『杏つ子』執筆の動機を理解すべきである。「作品よりも人生が先といふのがこれを書いてある作者の姿である」(「後記」)、「作者はその晩年に及んで書いた物語や自分自身の作品を、どのやうに整理してゆく者であるか、あらためて自分がどのやうに生きて来たかを、つねにはるかにしらべ上げる必要に迫られてあるものである(中略)それにつながる私といふ一個の生き方に終わりの句讀点をも打ちたかつたのである(中略)私はただこの一つの生涯の決算ともいふべきごたごたを、秩序をもつて整へてゆくことを決心したのである」(「あとがき」)とあるように、平四郎という主人公の親の代から始まり、杏子と呼ばれる娘の成長とその結婚、家庭生活を描き、最後にその破綻に終わったこの小説において、作者は、「生涯の決算」として、平四郎という人間の成長を、出生の秘密から、養父母の暮し、四度妻を変えた義兄、娘の離婚など苦闘の生涯のコンプレックスと体験とを少しも隠さずにもう一度振り返り、自分の尋常ならざる出生や成長ぶりを普遍的客観化することを図って、すべての生涯に起伏する栄光と悲惨を、作品の中で淡々と物語っている。

小説中に、「平四郎は六歳になつた」時、果樹の収穫を背負って家の前を通っている犀星の実父を見て、義母が「あんなにたくさん実つてゐる葡萄だつて、一房もお前に届けてくれないやつらぢやないか」(「あれをいよ」)というような、今まで正面から披露したことの無い実父とのよそよそしい関係を明かす告白はあるにはあるが、告白するに留まらず、更に積極的に人生に取り組み、平四郎という一人の小説家の歩んできた険しい人生の道を、まざまざとクローズアップしている。ここで作者は自分の詩も、小説も、生き方も、性格描写も、モラルも、人間観察も総合して、迫力に満ちた世界を展開し、その奮闘努力のキャリアを目に迫ってくるほど再現している。『杏つ子』は犀星文学の集大成で、「犀星さんという小説家をはだかにした、真に人間的な記録である」(16)。

人間の投げかけてくる生涯的な課題に対する犀星の答えに注目していこう。

人生については、

人間は或る地位に達すると、例へば家庭の父親であつても、大臣とか高官とか、えらい

音楽家になつても、時々、彼自身の地位とか名誉とか信頼とかを、或る日には美事に叩き潰して出直す必要がある、得体の分からない仲間の中に、自分を見さだめることで、さらに人間といふものを建て直して見たいのである。(「蟹」)

結婚生活については、

人間が一人の女を連れ、暮しの中をがつつ歩くといふことが不審である。縁もゆかりもない女と一生喧嘩をし、仲直りをし金の心配を分け合ひ、他人には見せられないことをして、とぼとぼと曠野を行き、街の中をほつつき歩いて、どちらかが先に死んで行く、このばかばかしい繰り返しに反抗も否定もないのである。(「夫婦」)

離婚については、

それはどちらも損なんだ、だが、女は生涯の損をしなければならないのに、男は一時の損をするといふことの違ひの大きさがある。しかし、それも何百万人の女の苦しんだみちで、どうにもなるものではない、嫌なことだが、こいつが一等苦しみなんだ。(「手紙」)

と、作者は誰にでも頷けさせるのに十分な答案を出している。

また、親と子供との関係を、

- 父といふ名前の偉大さは、何も彼も匿してしまはなければならなくなる。(「蟹」)
- 俺は一人の女を自分の好みに任せ、毎日作り上げようとしてゐるのではないか、それは自分の血すぢを引き、自分から分かれて出たものを、これまで生きて見てきたあるだけの美しい女に、作り變へようとしてゐるのではないか、そして、それを世界に見せびらかす前に、平四郎自身がつくづく美人だといふことをしりたかつたのだ。(「髪」)
- あれほど娘といふものに細かく氣をくだいてゐた平四郎は、けろりとしてどういふ對手でも、杏子の氣さえいれば結婚させるつもりでゐた。えらい男なぞ何處にもゐないし、将来えらくなるなどといふことも當になるものではない、たかが人間のことであり食べるだけの金を取ればそれでよい。(「男」)

と考へている。つまり、作者は、いずれも人間全体に共通して、父たる人であれば、誰もが当然こう思い、だれもが当たり前にかうやるのだと訴へている。

上記のように、作者は日常生活の立場から、『杏つ子』を一種の人生観として完成させ、自分自身のことから一般人への普遍化、社会化をし、前の『弄獅子』より、格段な進歩を成し遂げている。「何より、平四郎の苛烈な生きざまと困難に処する裁断の魅力であろう。逆境から自力で一定の社会的地歩を築いた主人公の生涯は、敗戦のどん底から漸く這い上がり、相対的な安定の中で自己の周囲を見まわした読者を、圧倒するに十分であった」(17)という船登芳雄氏の指摘通り、作者の分身である平四郎の姿は、単なる小説家というよりも、なりふりかまわぬ一人の生活者として現実に直面する氣迫を読者に感じさせる。それで、主人公、いや、作者の歩んできたこのような人生に感心を示さない読者はいないだろう。これこそ『杏つ子』が新しい読者を獲得した最大の原因だと思われる。

内容はいずれもごく平凡だが、真理として読者の心を打つものでなければならない。これはその後の全ての作品にも貫かれているものである。例えば、

○ をぢさんの生きる月日があとに詰まつてたくさんないんだもの、だから世間なんて構つてゐられないんだ。笑はうとする奴に笑つてもらひ、許してくれる者には許してもらふだけなんだよ。君はきらひかもしれないけど、その点で実に図図しい大手を振つて歩けるんだよ、世間で手を叩いて馬鹿扱ひにしたつて平氣なもんだ。生きるのに何を皆さんに遠慮する必要があるもんか。(「二、をばさま達」『蜜のあはれ』)

○ 年をとると、本物だけになつて、生きかへつてゐるところがある (同上)

○ 橋といふものは渡れば渡るほど、先には、もつと長いのがあるやうな気がするわ。(「四、いくつもある橋」『蜜のあはれ』)

と、いずれも哲理のあるものである。

このように、第三期の小説には、作者の分身である杏子も、権威にも暴力にもめげないなんでも自分の意志のままに振舞う「すて」もいれば、本当に申し分のない自分の理想像の女性として作り上げた冴野もいる。さらに自由自在に言語が駆使でき、創作方法が円熟の域に達した『蜜のあはれ』に、自分の意志や考えなどを思うままに表現するために作り上げた金魚姫もいる。野性味にあふれた第二期の「市井鬼」物に続き、社会化、普遍化した小説世界において、「はっきりと劣等であると認識できた場合は、それは問題でもなく、コンプレックスでもない」という指摘のように、「成熟」した世界に邁進してきた犀星は、「劣等感」は持っているには持っているが、正しくて、はっきりとそれを認識していて、心の中に何の拘りもなく人生を闊歩しているのである。

#### 2.4 円熟した創作方法によるコンプレックス解消効果の補強

この段階にいたって、人間の成熟をなすとともに、犀星文学は筆致が円熟している。例えば、冴野の野性は温順や優しさによって表現されているのに対し、金魚姫の優しさ、善良さは野性によって表現されている。それだけに、よりよい効果を納め、第二期の説得力の足りない作品と比べれば、十分に読者を納得させるものになっている。

冴野に会った時の時姫と紫苑の上の反応を見ていこう。

時姫は、

時姫の頭はふいに閃いたことは、夫兼家をとらへたこの女の持つものの豊富で、しかも殆ど縫ひ目なしに柔らかい物言ひは、したたか丈夫な心を持つものの態度だ、しかも、何一つとして欲しがらない今の冴野は、何處で何を學んだのであらうかと思つた。これだけの落ち着きと立派な應へを持つ女は、洛中でも數少ない女であつた。ある意味で紫苑の上とは、人物が上位にあるやうにも思はれた。(「八、香の草」)

紫苑の上は二回と冴野に会つたことがある。一回目は

冴野の大膽な言ひ分には、少しも嘘がない誠實があつた。そしてかういふ立派な真正面からものをいふ女と話したことが、今までに一度もなかつたのだ。女といふものがこんなにも恐れずに立つといふことが、紫苑の上のどこかを握り締め、そのため、すぐに言葉を奪ぎ取られて了つた氣がしたのだ。紫苑の上はその時、知識といふものを頭から抜き取ら

れた気がして（中略）はじめてあの様に真正直な方にお目にかかり、千年も後には人間は皆あんなにも虚飾のない心になることを、教へられました。（「六、うたたねのまに」）

と、反省させられてしまう。

そして、二回目は、再引用になるが、

この冴野の落ち着きはどうかであらうと。外部から動かされないで、自分を守り續けてみて少しの乱れも崩れも見せないであるのが、紫苑の上は自らの卑小を感じさせた。（「八、香の風」）

とあるように、段々と冴野の人格を認識し、かえって自分がコンプレックスを抱かせられるようになってしまっている。

この「少女半身、くちなわ半身、そして不思議な従順な半身」（「四、町の小道の女」）を持っている冴野は、「あふれる情痴をすみかがやかせ」、「最盛期に届いてあるところで自分を見極める目を持つてゐて」、退くべき時に、黄金提供の申し出も潔く断り、兼家から与えられてきた貴重な調度の類も返して、「渡りの女」となって、「さつと一時に身を退いて了」って消えていく。この一切は、「私には素直とか純情とかは決してほしくございません。私にはこの頃裸の女の激しさがあるばかりなのです」（「六、うたたねのまに」）という、偽りのない彼女の本音から発する行動なのである。ゆえに、「品とか位とかいふものを生まれながらに持った女と見てよい」（「一、花やぐひと」）、しかも、「歌才能文の誇り」（「二、山辺の垣ほ」）を持っているにも拘わらず、紫苑の上は、

（冴野が）同じ思ひと愛情とをきつぱりと断ち切つて去るといふことは、（中略）誰人にも豫想のつかない鋭い心遣いであつた。潔白とか清純とかいふことではない、これは心に張り詰めた物を柔しく紫苑の上に、再び、張り戻してゐることに他ならない（中略）私があの子の立場にあつたら品々を返すところに返し、黄金を拒んで去る事ができようか、私にはさういふ無慾の思いきりはできない、できないのが本来なのだ、できないことをやつて退くといふことは竝々でない人となりがあるのだ。たとへ、いくらかの意地づくがあつても、到底、常人に為し得るわざではない、それは女にはもはや認められないほどの、むかしの女の心にあつたかも知れない妙な柔しいものが、ずつと、冴野といふ女の奥の方に見えてゐる。（「十、あたらし野の姫」）

と、つくづくと考えさせられるようになってしまう。こんなにやさしい女に去られたからこそ、兼家は「逆上とか興奮とかいふものではない、凡てが壊されたものが臆面もなく、横溢してゐる人間の余りにあらはな悶えであつた」（同上）という感じがさせられるようになる。

この他に、第二期の作品と同じように、野性的だが、やさしい心の持ち主で、何でもできるという人間像も多く作り上げられている。例えば、『杏つ子』の中の、「職業がらもあつて」、「何人から、言葉をもつて自分の意志を暫くでも我慢することを、嫌つてゐる」（「雲の中」）で、「生きてゐる間は、理由のない負け方をするのは、卑屈だと考へてゐた」（「一つの瞬間」）平四郎。彼は、いざとなると、「かういふ時に非常な勢ひで、立ちあがつて相手を捌く氣短さのあ」つて、「仁王立ちに立ち上」り、「對手が誰であらうが半氣狂ひの氣ぶりを見せはじめたら、もう

停めることの出来ない男である」(「飯」)。野性的に見えるが、一人の私生児の身を用いて、並々な努力を通じて、一人前の詩人と小説家となり、広く社会に歓迎されている。それに、立派な父として、家族のことを大事にして、強い意志を抱いている。それで、子供たちは文句があって、反抗しようと思っても、しようがないのである。例えば、亮吉と一緒に父の丹精をこめてつくった庭園を壊した後、平之介は、「俺は貴様に加勢してゐるのではないぞ。俺は一生に一度おやちに反逆するために、こいつをひつくり返すのだ(中略)おれは君の味方ではないぞ。おれは君を叩きのめすために、敢えてそれを避けるために、こいつを倒壊してやるのだ、分かつたか。俺は君に見方をしてみないことだけは覚えて置け」と断る。これは平四郎が余りにも偉いため、子供達が逆らおうと思っても「正確な反逆な理由がない」(「反逆の仮象」)からである。

このように、創作技法を絶えず磨いてきた犀星は、無上の芸術的境地に達して、「同時代に比類のない高みにまで到達し」(18)、「明治以来の日本文学の前人未踏の秘境を極め、世界の現代文学の最先端を行く前衛作家になった」(19)。この円熟した創作技法の力が加わって、コンプレックス解消の過程が完璧に再現され、作者は堂々たる一人前の人間として、世を渡るようになっていく。

### 3. おわりに

ユングが、

コンプレックスは広義においての一種の劣等性を示す。——このことに対して私は、コンプレックスを持つことは必ずしも劣等性を意味するものでないただちにつけ加えることによって、限定を加えなければならない。コンプレックスを持つことは、何か両立しがたい、同化されていない、葛藤をおこすものが存在していることを意味しているだけである。——多分それは障害であろう。しかしそれは偉大な努力を刺激するものであり、そして、多分新しい仕事を遂行する可能性のいとぐちでもであろう。(20)

と指摘しているように、コンプレックスは人間の成長にとって、マイナスの面も持っているが、そこには人格発展の原動力も含まれている。「出生に対する自己嫌悪を超え、文学世界を開花させた」(21)とか、「この多彩な文学活動をもたらしたエネルギーの根源は、ただ一つ、出世と生い立ちの悲惨にかかわる内的相克、その因果な諸関係からの脱出・上昇志向にあったと言っている」(22)、「犀星は生い立ち、学歴、容貌等々多くのコンプレックスがある(中略)しかし、犀星はそれをのりこえようと努力する。コンプレックスが一つの起爆剤となった」(23)とか、「彼はコンプレックスを、逆境を、武器にしてすさまじい小説世界をつくりあげ」(24)とか、多くの方の指摘通りに、ずっと文学創作に「派生補償」を求めている犀星は、第一期において、「みせかけ補償」と「なぐさめ補償」を用いて、自分の心の中に潜んだコンプレックスを「抑圧」して、「抒情性」豊かな作品を創作することを通して、完全無欠な世界を描いている。しかし、美化の結果は一時的な自己陶醉で、暫くの間はコンプレックスを忘れ、或いは

は薄めることが出来るにしても、とうてい自分の心の底に強く根ざしたコンプレックスから脱出できないのである。それを認識した作家は、第二期の小説創作において、出生と生い立ちの実相をそのまま暴露することを通じて、自己のコンプレックスの元を告白し、「攻撃補償」をとり、野性な一面と善良な一面を兼ね備えている人間像を作り上げ、その「抵抗」を通じて、「物すごく暴れてみたい氣」を満たして、コンプレックスからある程度解き放たれる。しかし、やはり「自我のみにしがみつ」きすぎて、根本的なコンプレックス解消ができないのである。いろいろと人生を体験した後、自己コンプレックスを破り、自分の尋常ならざる出生や成長などを全て普遍化、社会化して、人生の成熟を完成している。人生の成熟を果たしてからこそ、円熟した作法を用い、人間らしい人間像の創造に成功して、自分の文学を完成しているのである。それで、「人々はその幻怪な美に陶酔するとともに、不屈な人生に勇気づけられる」(25) のだと思われる。

注：

- (1) 拙稿「コンプレックス脱出の試み——第一期の自伝三部作における脱出の努力」『室生犀星研究』第23輯（室生犀星学会、2001）
- (2) 拙稿「『市井鬼』による中途半端なコンプレックス脱出——犀星の第二期小説創作について」『神戸女学院大学論集』第142号（神戸女学院大学研究所、2002）
- (3) 拙稿「『コンプレックス』から『自己実現』まで」『室生犀星研究』第24輯（室生犀星学会、2002）
- (4) 河合隼雄『コンプレックスと人間1』（岩波書店、2001）
- (5) Adler・Alferd（山下肇訳）『現代人の心理構造』（日本教文社、1957）
- (6) 室生犀星「芥川龍之介の人と作品」『新潮』（新潮社、1926）
- (7) 室生犀星「天命」『作家の手記』（河出書房、1938）
- (8) 室生犀星「原稿料」『泥雀の歌』（実業之日本社、1942）
- (9) 室生犀星『私の履歴書』（講談社、1962）
- (10) 奥野健男『日本文学史』（中央公論社、1970）
- (11) 注（9）に同じ
- (12) 奥野健男「わが室生犀星讃」『解釈と鑑賞—室生犀星特集』43（2）（至文堂、1978）
- (13) 注（4）に同じ
- (14) 注（4）に同じ
- (15) France G.Wicks（秋山さと子・国分久子訳）『子供時代の内的世界』（海鳴社、1983）
- (16) 福永武彦「怒りの文学」『図書新聞』（図書新聞社、1957）
- (17) 船登芳雄『室生犀星論—出生の悲劇と文学』（三弥井書店、1981）
- (18) 中村真一郎「詩人の肖像」『日本の詩歌・15・室生犀星』（中央公論社、1968）
- (19) 注（10）に同じ
- (20) Jung, C.G, 『Modern Man in Search of a Soul』（注（4）の『コンプレックスと人間1』による）
- (21) 吉本隆明「室生犀星」『群像』（講談社、1961）
- (22) 船登芳雄「室生犀星における出生の内的相克と作品」『日本文学』（日本文学協会、1979）
- (23) 本多浩「犀星・交友・文学」『解釈と鑑賞—室生犀星特集』43（2）（至文堂、1978）
- (24) 奥野健男「室生犀星入門」『室生犀星評価の変遷』（三弥井書店、1986）
- (25) 注（24）に同じ

テキスト

『幼年時代』、『性に眼覚める頃』、『或る少女の死まで』、『弄獅子』、『舌を噛み切った女』、『杏つ子』、『かげろうの日記遺文』、『蜜のあはれ』は全部『室生犀星全集』（新潮社、1976）による。

謝辞

本稿作成の段階において、いろいろとご指導を頂き、そして、資料も多く提供していただいた蔵中さやか先生、金沢学院の笠森勇先生と広東外語外貿大学の顧也力先生に心から厚くお礼を申し上げます。

本稿における誤りなどは全て筆者の責任である。

（原稿受理 2002年3月22日）